

2024年
新紙幣発行記念
新渡戸記念館 パネル展

しんさつ いじん
新札の3偉人と
とわだ にべ
十和田・新渡戸の
ふか えん
深い縁 円

YEN



新渡戸記念館

しぶ さわ えい いち
渋沢栄一

三本木原開拓の志を継ぎ「渋沢農場」を開設
新渡戸稲造と共に日米友好、国際平和に尽くす

新1万円札の顔・渋沢栄一(1840~1931)は、公共のため多くの社会事業に尽力していますが、当地においては明治大正期の三本木原開拓を「渋沢農場」の運営を通して援助、継続させました。

開拓の祖・新渡戸傳翁つとむの没後、三本木原開拓は1884(明治17)年地域の人々が三本木共立開墾会社を設立して継続しました。しかし、1888(明治21)年には経営難に陥り、取引のあった第一国立銀行の経営者、渋沢栄一が株を引き受け、1890(明治23)年開拓地東側に渋沢農場を開設。渋沢の援助で、開墾会社は荒廃した開墾地の復旧と稲生川の補修を行い、稲生川の水路を明治末頃までに太平洋岸まで延長させました。更に1938(昭和13)年着工の三本木原開拓国営事業は、渋沢農場が

渋沢栄一肖像(印刷局工芸官による)

推進役となり実現。第5代場長水野陳好みずののぶよし(初代市長、名誉市民)の379回の陳情と、貴族院議員・新渡戸稲造の窓口としての尽力がありました。渋沢栄一と新渡戸稲造はそれ以前にも、日米交換教授(1911・明治44年)、日本国際連盟協会(1920・大正9年)、日本太平洋問題調査会(1926・大正15年)などで国際平和のため共に活動しており、二重三重のご縁があります。



つだうめこ
津田梅子

新渡戸稲造と共に日本の女子高等教育に尽力
梅子の友人たちも「BUSHIDO」に深いかかわりが

新五千円札の津田梅子(1864~1929)は、1871(明治4)年6歳の時、初の日本人女子留学生として、岩倉使節団一行と共にアメリカに渡り、帰国後は日本の女子高等教育の先駆者となりました。

津田が1900(明治33)年女子英学塾(現津田塾大学)を創設した時、厚く支援したのがフィラデルフィアのクエーカーたちです。稲造は留学先のフィラデルフィアでクエーカーとなり、妻メリーはクエーカーの有力者・エルキントン家出身です。特にメリーの友人、アナ・C・ハーツホンは津田とフィラデルフィアの布林マー大学で出会い大親友となりました。稲造は英学塾時代から30年同学理事を務め、塾発行の英語学習誌『英文新誌』編集顧問となり、度々講義も行うなど「津田塾のおじ」として様々な支援を行いました。

稲造が病氣療養中カルフォルニアで『BUSHIDO』(1900・明治33年刊)を執筆する際、大きな助けとなったのがアナであり、津田と女子英学塾を設立した英文学者・櫻井鷗村は、1908(明治41)年『BUSHIDO』の最初の邦訳を刊行しました。更に稲造の次兄・道郎が三本木原開拓を継ぐため、父、津田仙の「学農社」農学校で学んだ縁もあり、関りは父娘二代にわたっています。



津田梅子肖像(印刷局工芸官による)

きた さと しば さぶろう
北里柴三郎

新渡戸十次郎が幕末に行った馬市開業の施策が
北里研究所三本木支所設立につながる

新千円札の北里柴三郎(1853~1931)は、破傷風菌の純粹培養の成功、血清療法開発、ペスト菌発見など、生涯にわたって感染症の予防に力を尽くしました。

十和田市には北里柴三郎を学祖とする北里大学獣医学部がありますが、これは十和田が馬のまちとして栄えた歴史が関係しています。1860(万延元)年、新渡戸十次郎は三本木原開拓の総合計画『さんぼんぎたいかいぎょうのき三本木平開業之記』を発表、産業振興の施策の筆頭に馬市をあげています。当時三本木に馬市は無く、五戸、七戸の官営馬市で競りはおこなわれていました。競りで広く馬と人を集め、賑わいを創出する取り組みとして1863(文久3)年に馬市を三本木に開設、以来「おせり」で発展し、1884(明治17)年に軍馬育成所(後の軍馬補充部)が開設、「軍馬御用」によって三本木の馬市は活況を呈しました。

1945(昭和20)年の終戦により軍馬補充部は解体されましたが、戦後の伝染病蔓延からGHQが北里研究所にワクチン、血清製造などを要請、日本政府は血清製造に適した馬が容易に入手できる場所として軍馬補充部のあった三本木を選び、1947(昭和23)年、北里研究所三本木支所を開設、それが後の北里大学獣医学部の誘致につながったのです。



北里柴三郎肖像(印刷局工芸官による)

新渡戸稲造

東西文化の理解と融和によって豊かな農村を築き
より良い世界へ導く「太平洋の橋」を志す

1984(昭和59)年五千円札の肖像となった新渡戸稲造(1862~1933)は、南部盛岡藩士・新渡戸十次郎の三男として生まれ、三本木原開拓で上水した稲生川と、その恵みの初穂に因み稲之助(のち稲造)と名付けられました。

明治9(1876)年明治天皇が東北御巡幸の折に三本木原開拓を賞賛されたことをきっかけに、祖父や父同様に、農業開拓を天職として札幌農学校に進学しました。近代的西洋の農学を学ぶ中、東西文化の理解と融和こそ、当時の日本、そして世界の課題と考え、「太平洋の橋」となることを目指しました。

アメリカ、ドイツ留学後、札幌農学校教授、京都・東京帝大教授、第一高等学校校長を歴任、農学・法学博士としての専門指導のみならず人格教育に努め、新時代の担い手の育成に努めました。大正8(1919)年には国際連盟事務次長となり、ユネスコ活動の前身・国際知的協力委員会の幹事となっています。世界各国が戦争へと歩を早める中、命の尽きる最後まで平和を訴え、昭和8(1933)年カナダ・ビクトリアで客死しました。



新渡戸稲造肖像画(印刷局工芸官による)